



経済学用語集
古典派の第二公準

講師：加藤 真也

古典派の第二公準

ケインズは否定

Marginal Disutility

: 労働の限界不効用 MDU と

(正確には、余暇の財に対する限界代替率)

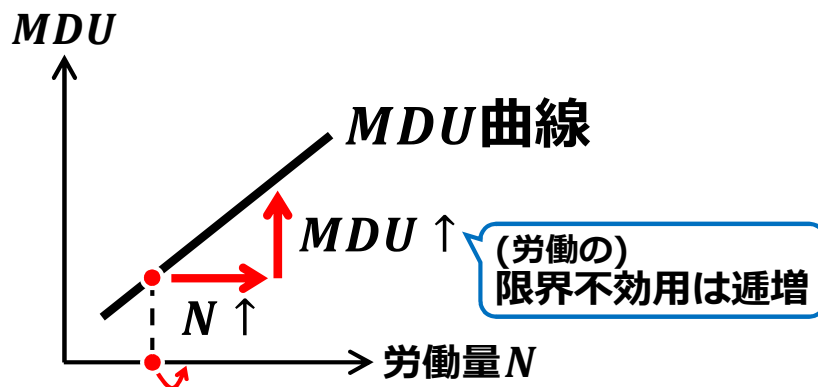
実質賃金(率) $\frac{w}{p}$ が等しくなる

ように、家計は労働供給量 N_S
を決める

⇒ 家計の効用最大化

労働の限界不効用MDU

: さらに1時間働くことで
増える不効用(不快感)



直観 $MDU = \frac{W}{P}$

式変形すると、

$$P \cdot MDU = W$$

(数値例)

さらに1時間働いて失う効用は、
財を3個食べることで賄える

⇒ $MDU = 3$ (個)

財は1個100円とすると、

$P \cdot MDU = 100 \times 3 = 300$ (円)

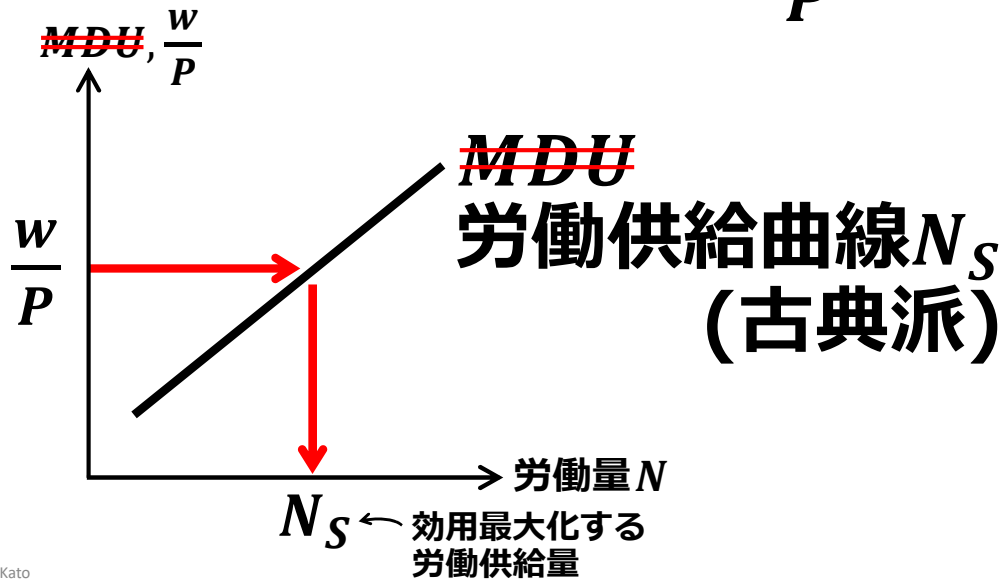
$P \cdot MDU$: さらに1時間働くことで増える費用

さらに1時間働くことで失う効用(財何個分か)

W : さらに1時間働くことで増える収入

名目賃金(率)

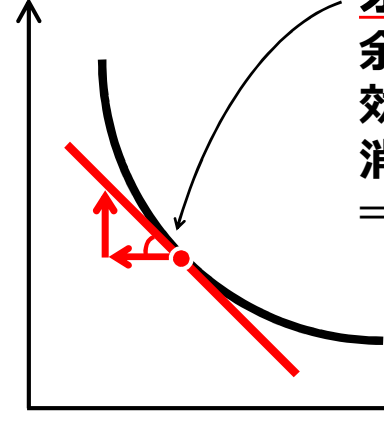
古典派の第二公準($MDU = \frac{w}{P}$)より、



(参考)余暇の財に対する限界代替率

(余暇と財の限界代替率)

財(消費量) x



余暇の財に対する限界代替率

余暇を1時間減らす(1時間働く)と効用が減るので、追加的に財を消費することで元の効用に戻す
⇒ 1時間働くことで下がる効用を財何個分かで表現した

家計の無差別曲線

→ 余暇 l

働かない時間

まとめ

古典派の

ケインズは認める

ケインズは認めない

第一公準 → 第二公準

労働需要量の決定 → 労働供給量の決定